「五葉山の魅力」

五葉山自然倶楽部創立10周年に寄せて

リレーエッセイ ⑤⑧

山並みからのメッセージ

奥州市水沢区　大村千恵

このリレーエッセイへの執筆依頼をいただいてから随分と月日が経った。そもそも五葉山を知らない私が、この〝神聖〟な紙面を汚していいのかという戸惑いがあった。

しかしながら、担当者の純粋で熱心なお誘いと何よりもこれまで掲載された数々の玉稿に触れ、私の心は強く動かされた。

そして気付いたことは、この四半世紀、子どもたちとかかわってきて得た私自身の子ども観と、五葉の山々が訴える自然観とが見事に一致するということだ。

山々を構成する森は、それぞれの植物が互いに守り合い、競いながら特性を発揮し、全体としてバランスを保って成長する。

そうした「森」は、台風や日照り、病害虫に対して単一の樹木とは比べものにならないほど強い抵抗力を備えている。

高木から低木、草やコケまで、それぞれの地域に本来自生している多様な植物の集合によって形成されている森、このふるさとの山々が私たちに訴えかけているものは、まさに人間社会のありようだ。

昭和の終わりごろ、私は一人の少年に出会った。頭をスキンヘッドにまるめ、口元に無精ひげを蓄えた、おおよそ中学生には見えない風貌だ。

ある日、PTAの係をしていた私が学校を訪れると、彼は職員室でうつむいたまま正座していた。何でも、開校以来きっての〝つっぱり〟少年だと噂されていた。

うつろな彼のまなざしに、私はかつての自分が重なった。高校三年の秋、若気の至りで転校を余儀なくされた私は、松島の透明な海を見つめていた。

茫然自失になりながらも脳裏から離れないのは、朝の暗いうちから深夜まで真っ黒に日焼けしながら野良仕事に精を出す母の姿だった。当時、家族を置いて出て行った父は、たまに帰ってきては母に暴力を振るう。

母は一切の恨み言を言わず、ただひたすら私たち四人の子どもと義母の生活を一心に支え、年中働きづめだった。

その母をこれ以上悲しませていいのか？苦しめていいのか？命の制裁を自問自答する私の心にブレーキをかけたのは、物言わぬ母の姿だった。自分の浅はかさを悔いて懐に飛び込んだ私を、何も言わず抱きしめてくれた母。

しかし、世間の目は厳しかった。「一人親だからあいつは不良になった」と。自分の未熟さは責められても仕方がないが、懸命に育ててくれている母を侮辱されているようで辛かった。

職員室で正座するつっぱり少年。実はとても心根が優しかった。「人に迷惑をかけるようなことをしたら、お前を殺して父ちゃんも死ぬ！」と、詰め寄った父親に彼は一言つぶやいた。

「クラスの連絡簿、俺のは母ちゃんの欄が真っ白だ…」「つらい思いをさせてごめん。父ちゃん一生懸命かせいで、母ちゃんを迎えに行くからな…」

子どもたちをずっと応援し続けてきた私の原点だ。どの子も精一杯生きている。教育の究極の目的は人間をつくること。そして、それは必要なところにこそ施されなければならない。

どんな人間に育てたいのか、突き詰めて考えたら『自立と共生』にたどり着いた。それは自然も人間も、生きとし生けるもの万物に通ずる姿だと五葉山に教えられた。

【執筆者プロフィール】一九五〇年、旧水沢市生まれ。二人の息子が中学生のときPTA役員を担当。当時の荒れた学園状況に心を痛め、つっぱり少年と真正面から向き合う。

勉強や部活動等においてステージを持ち得ない子にとっては、自分を表現する場所や放課後を過ごす場所が極端に少なく、浮遊している現実に直面する。

九九年、子どもの居場所「ホワイトキャンバス」を開設。親や大人たちに、子どもたちを「どう育てたいのか」という強い信念を持つことの大切さを唱え続け、青少年の健全育成に日々努めている。

中高生と乳幼児のふれあい交流活動「ちびっ子ひろば」で（中央奥が筆者）